

「腐れ縁・悪縁」

——小林茂君の謂う「奇縁・好縁」を承けて——

飛田就一

かつて小林茂君（ここではすべて、高等学校の同期生・同級生であったことへの親愛の情をこめて、「君」づけで呼称する。）は、ぼくたちの関係にふれて「奇縁・好縁」と書いた（「立命館経済学」、1994年、第43巻、第5号）。なるほど、そのとおりでらう。しかし、「縁」にもいろいろあって、「良縁」・「内縁」・「離縁」・「復縁」などはともかくとしても、離れようにも離れられない、切っても切れない関係としての「腐れ縁」、好ましいけれども「悪縁」というものもある。「奇縁・好縁」だという小林説に、ぼくは、敢えて反対する気など毛頭ないが、ぼくたちの関係は、その内容や有り様はさておき、どうも「腐れ縁・悪縁」でもあるような気が、ぼくにはしている。

かれこれ45年以上もむかしのことである。旧制の中学校も敗戦後の学制改革によって新制の高等学校とかわり、その発足したばかりの揺籃期にあって、同期生・同級生として、物も心もともに貧しい敗戦後の青春時代の一時期をともにした奥村剋三君と末川清君とを加えた四人が、高等学校卒業後、それぞれ交又することのない別べつの道を、それぞれの専門分野を異にしながら歩き、そしてあるとき、それぞれ機を得て、ぼくたちは同じ大学の同僚となった。この四人の立命館での「出会い」は、おそらく、実現すべき必然ではなく、偶然の「たわむれ」か「いたずら」か、なにかの因縁であったのかもしれない。だが、そうではあってもやはり、そこには、「人の世の縁」を感じざるをえない。そうなった「筋道」や「事情」などどうでもよい。単純にそう感じたほうが、いい。人と人との「出会い」はもともとそんなものだ、と理屈ぬきに思ったほうが、人生の「味」もでてくる。いわば、「こうなったのもなにかの縁」だったのだろう。

なが年にわたる立命館生活での小林茂君のそれぞれの分野での貢献については、ぼくなどより、つぶさに知る人も、また語るにふさわしい人も、多い。小林君が、たとえば学部教学の専門外の立場にありながらも学部主事という重い職務を全うしたこと、立命館大学の外国語教育についての全学的な責任体制の中核にあって、その旧来のあり方に革新すべき面を積極的に提案・推進の重責を担ったりしたことなど、もちろん周知のことだ。ここでは、その他のことなどいちいち枚挙する必要はない。ただ、ここでは、ぼくの印象に強く残っていることだけをひとつ、いささか独断的にとりあげておこう。

いわゆる「国際性」とか「国際化」とかいう命題が立命館教学のひとつの「要」になってきたのは、立命館の歴史全体からみれば、そんなに古いことではなく、むしろまだ新しい、ここ10年あまりのことだろう。それは、「時代」と「状況」との変遷のなかでの、むしろ立命館の新しいひとつの様相となりつつあるが、多くの、大きな努力にささえられたそのごの眼を見張るほどの急速な展開と変貌には、ふるい視野からも驚嘆と期待が注がれるだろう。

大学が「国際性」・「国際化」を標榜するとき、その具体的で基本的な指標のひとつとして、いわゆる「外国語教育」の問題があり、学問の研究と教育とが、当然のことではあるけれども、国際的な視野と次元で展開されているかどうか、ということがあろう。そして大学が「学問の研究と教育」というとき、たとえばドイツの大学にみられるように、そこにはその「制度」・「体制」としても、たんに国民・国家のための、という自国主義の枠組みをこえているはずだ。それは、こんにちでもやはり、ただ「時代の要請」・「経営の政策」としてだけでなく、もともと「普遍の原理」にたつ大学の属性であったはずだ。

異文化としての外国語の教育が、なによりもまず「言語教育」として位置づけられるなら、それに適した、有効な制度と先進の設備と有能な人材とを具備するという面でも、とうぜん実現されていなければならないだろう。小林君は、立命館での「国際性」・「国際化」が標榜されはじめるよりはやく、すでに1970年代なかごろには、外国語教育の教室現場での多様で特徴的な在り方を教員と学生との双方の実態と関心とをふまえて、とりわけ視聴覚的方法に対応する設備・機器などの不備を訴え、外国人教員の適切な登用など、その改善のための綿密な具体案を的確に提起している。卒直に言って、当時の立命館での外国語の教育・学習のための環境・条件はかならずしも恵まれてはいなかった。だが、当時はまだ「機」は熟していなかった。その実現への道のりは遠く、そこにいたるには解決しておかなければならないさまざまな問題もあったようだ。小林君自身は、その「環境づくり」に努め、「施設への展望」を開いたにすぎない、と言う。そうかもしれない。しかしそれは、こんにちの立命館の外国語教育の基礎をつくるための、どうしても通過しなければならないプロセスであり、手順でもあっただろう。

そのころはくなどは、視聴覚教育への認識を欠いており、経験もなく、もちろん知識も技能もなかった。ぼくたちの世代がうけた戦時下での外国語教育は論外だとしても、ぼくなどは、専門書を「眼」だけで読む能力をねらった外国語学習を、原文と辞書と文法書さえ手にすれば、それに加えて教員には白墨と黒板さえ与えておけば、あとは忍耐がよくがむしゃらにやるだけだ、という非合理的な体験主義が根づよく、正直に言って、当時はまだ啓蒙以前にあった。いまにして思えば、小林君は、ぼくよりも、はるか先を進んでいた。

なるほど英語教育については、いわば専門家としての小林君は、はじめから「国際派」であった。第二次大戦後、その翌1946年にアメリカが世界各国との教授・研究者・学生の支援を定めた「フルブライト法」による、いわゆる「フルブライト留学生」として小林君は、大学を出てほどなく、教職についたまま、1960年にはアメリカに渡り、テキサス大学大学院で言語学と英語教育法を研究している。ここで、異文化としての英語についての知見も技能も、いっそう深く、そしていっそう広く体得する。おそらくそうしたことが、すでに1969年に出版されている『英会話演習』全3巻に具体化されているのだろう。

また、もとより小林君は、アメリカ文学も射程内におき、とりわけ現代のユダヤ系作家と黒人文学とに関心を寄せていたこともあったようだ。そしてさらに、小林君の関心が、人類の営為としての文明、その文明史的ないし文明論的な領域にまでおよんでいることは、『謎の古代文明』(1974年)、『海底の文代遺産』(1977年)、『シルクロード発掘秘話』(1981年)などの一連の訳業がしめしてもいるだろう。

そしていまも、小林君の仕事はつづく。好調・不調をくりかえしては、心不全の状態までひき

おこしたりしている心臓の機能とうまくつきあいながら小林君は、現代のアメリカ社会で、タブーとなっている俗語、いわば「禁じられた語句」も実際に、日常的に使用され、通用してはいるが、英語を日常語としていない言語生活での使用についての問題性を、使用されている実際の英語原文に即して解説を加える、というユニークな辞典の製作にとりくんで、緻密な作業をすすめている。仕事そのものの困難さに加えて体調にあわせながら仕事をすすめるのには、もどかしい気もあるだろう。それは、ほくにも体験的によくわかる。出版社のほうでも、さぞやきもきしていることだろう。しかしさいわい、もうその時間はそう必要ではないようだ。この辞典の出版のときが、待ちわびられる。

ところで、こうした小林君の英語についての広く深い知見の恩恵をうけているのは、ほくひとりではないだろう。ほくは、とくに英語文を日本語文に翻訳するのに、ずいぶん小林君の助言・援助をうけている。あるときは面と向かいあって、またあるときは、昼夜をかまわず電話に呼びだして、ながながと質問し、教示をもとめる。考えてみれば、めいわくなばあいもあっただろう。だが小林君の応答は、いつでも、どんなケースでもきわめて積極的での確である。専門分野の異なる、ましてや哲学という「えたいの知れない」・「正体不明」な性向の強いものについて、英語でのコンセプトやセンテンスに日本語で対応させるには、もちろんただ好意だけでできるものではなく、英語そのものについても、また日本語自体についても深い理解と広い視野とがなくてはできないことだ。英語文からの日本語文へのほくの翻訳には、肝心なところで、小林君に助けられた部分が多いのだ。

また、しばしば、問うほうも答えるほうも、肝心の論点をとびこえて、当初の本来の問題などどこかに消えてしまった「おしゃべり」に時をすごしていることもある。面と向かい合っていると、「まあ、お茶でものみにいこうか。」ということになる。ほんとうのところ、この類のケースでは、こちらのほうに費す時間のほうがながく、多い。それは、一見、無駄で無益にも、時間の浪費にもみえないこともない。だが、それがまた、ほくたちの立命館生活のなかで占めた意義は、大きかった。そしてそれは、立命館生活をともになれた現在もつづいているし、これから先も、つづくだろう。そしてそれが、冒頭に言った、ほくの言うところの「腐れ縁・悪縁」の所以のひとつでもある。

なるほどその現実には、小林君が言っているように「奇縁・好縁」にはちがいないが、それが同時に、どうにもならない「腐れ縁・悪縁」なのだ。小林君もほくも、つけられた病名や疾患の状態にも質にもちがいがあがあるが、さらにやられた「時」からすれば小林君のほうが「先輩」ではあるが、ともに心臓という臓器をやられている。こんな「つきあい」、こんな「因縁」は、どう考えても、まったくもって「腐れ縁・悪縁」だ。

このように小林君とほくとは「奇縁・好縁」から「腐れ縁・悪縁」までともにすることになったのだが、ただひとつここで、ほくが小林君について残念に思うことがある。それは、いまほくがこの駄文を書く破目になっていることである。立命館にとっても小林君は、ほくのような「無用の長物」とはちがって、まさに「必要な時に、必要な才」をそなえている。予定されていない小林君の「依願退職」の願い出に対して、学部長の誠意を尽くし、時間をかけた翻意への説得

には、小林君は感謝しながらも、ほくのばあいのように「時間切れ」とはちがって、その時まで2年という時間の余裕を残して、みずからの意志と判断で、立命館生活に終止符を打った。なぜか。そのすべては、わからない。だが、それが、いかにも小林君らしいひとつの身の処し方ではある。——立命館を去るのも、小林君とともにすることになった。ここにも、「腐れ縁・悪縁」が働いていたのだろうか。「奇縁・好縁」に感謝しながら、「腐れ縁・悪縁」にも、しあわせを祈ろう。

(1995年10月20日)